竹林管理の最前線 ①

繁殖・成長の特性理解を

全国で竹林管理が課題になっている。県立広島大学生物資源科学部教授の荻田信二郎氏に、竹林の維持管理のポイントや竹の有効活用事例について解説してもらう。

◇

「今は昔、竹取の翁（おきな）といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことにつかひけり」。これは有名な「竹取物語」冒頭の一説だ。詳細は不明だが、この物語は平安時代前期には成立していたとする説がある。当時から竹が生活に密着して使われていたことがうかがえ、日本人にとって大変なじみ深い植物であったと考えることができる。

竹（イネ科タケ亜科に分類される植物）の種類は、世界で1200～1400種類に上るといわれ、日本を含む東アジアに分布する温帯性タケ類、アジア・アフリカ・中南米に分布する汎（はん）熱帯性タケ類と草本性タケ類からなる。温帯性の竹は、主に地下茎を介して稈（かん）を広範囲に発生させながら拡大成長するのに対して、熱帯性の竹は、稲やススキと同様に稈を密集させながら株立ちする特性を持つ。

日本に生育する竹の仲間は、130種類余りとされているが、いわゆる「竹林」と呼ばれているのは、孟宗竹（モウソウチク）、真竹（マダケ）、淡竹（ハチク）だ。これらは直径が3～20センチ、高さは10～20メートルに達し、地下茎を伸長させ、タケノコの発生により栄養繁殖する。

写真を見てほしい。これらの竹を見分けるには、まず稈の節を観察するとモウソウチクは環が一つ、マダケとハチクには環が二つある。春先に発生するタケノコの稈鞘（かんしょう）、いわゆる竹の皮にも特徴がある。例えばモウソウチクのように無数の毛に覆われて黒々としていたり、マダケのように独特なまだら模様があったりするので、この時期は容易に見分けられる。

竹には形成層がなく樹木のような肥大成長はできない。また諸説あるが、竹の寿命は最長で30年程度、地下茎は10年程度とされる。3、4年目の地下茎が最もタケノコの生産力が高く、5年目を過ぎると生産力が落ちる他、豊作と凶作がおおむね隔年に現れる。このような特性を十分に理解しながら竹林を管理維持する必要がある。

（次回は8月2日付）

左からモウソウチク、マダケ、ハチク（広島県内で筆者撮影）

おぎた・しんじろう　1968年神奈川県生まれ。植物の資源利用に関する教育研究に従事する。97年農学博士（東京農工大学）、農水省森林総合研究所、奈良先端科学技術大学院大学で博士研究員、富山県立大学工学部を経て、2015年4月より県立広島大学生物資源科学部学部長（現職）。

©日本農業新聞　無断複製転載を禁じます。